



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | いのちについて考える                                                                  |
| Author(s)    | 鷺田, 清一                                                                      |
| Citation     | 臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 103-105                                            |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/81751">https://doi.org/10.18910/81751</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## いのちについて考える

驚田清一

「いのち」について考えるとき、たとえば英語で言う「ライフ」にみられるようなその意味のひろがりや、十分に保持しておきたいと思う。生命と生活、いのちとくらしという、意味の幅を、である。

生命というと、なにか生き物の内部にあって、生き物を生き物としている実体のように考えられることがある。まるで生命の炎とでもいべきものがあって、それがいつかふっと消えるかのように、である。他方、生活といえば他人と共同のものである。他人との関係から離れて、くらしというものは成り立たない。食べ物一つ調達するのも、社会の大きな機構が働かなくなったら至難のことになる。

そして、いのちと言うときには、他人との関係はたんに社会的というときよりもっと濃いものになる。愛する人に「きみこそわが命」と言われるばあいや、あるいは家族に「あんたの命、いったいだれのもんやと思てんのん」と言われるばあいというのは、いのちは人と人とのあいだの支え—支えられる関係をいう。このいのちのつながりや接触という契機こそ、人間のいのちにとってきわめて本質的なものであると考えるから、わたしは生命ということばより「いのち」ということばをここで用いたいと思うのだ。

母の乳を吸うときのような他者との交感、物を食べたりしゃぶったりするときの食べ物との交感、まなざしが他人を傷つけたり慈しんだりすること、他人の介護においてからだを支えるときのその力、そして肌の接触、性のいとなみ……。いのちのもっとも基礎的な場面でひとはいのちを深く交えている。この交感がいのちのなかを流れている。

こういう交感を核としてのいのちを考えようとするときに、ここでなぜ、いわゆる生命理論や生命科学の本を引きあいに出そうとしないかと言うと、いのちの誕生と病いと衰弱と死という、いのちにとってのつぎきならないいくつかの出来事が、わたしたちの日々のくらしからいわばシステムティックに見えなくされてきているからだ。

手に入れた獲物や食べ物をその場で食べずに持ち帰り、仲間とともに分けて食べるのが、食事にかんして人間と他の動物とを区別する唯一のメルクマールだと、霊

長類学者の山際寿一さんがあるエッセイのなかで書いていた。ハンバーガー・ショップなどで食べ物を購入し、その場でそれをひとりでもぐもぐ食べているこのごろの青年たちの姿を見ていると、人間はひょっとしたら退化の過程に入っているのかもしれない、と。

いのちの衰弱？ 乳児は愛情を失ったとき、食べることへの関心をなくすことがあるという。精神の不安定と早食いとの関係は、傍目にもすぐにわかる。くらしのベーシックである食の場面ひとつとってもいのちの様態はそこに微細に映しだされる。ともに作り、ともに食べるという、食における共同性の欠落がいのちを蝕んでいるのではないかというのが、きっと山際さんの感想なのだろう。

調理にかぎらず、くらしのベーシックをひとつひとつ順に、家族という共同の場から外へと出す、外部の業者に委託するというのが、近代化する社会の大きな流れであった。

そしてそれは、日常生活の身近な場面からくらしのベーシックがいとなまれるプロセスが見えなくなるということでもある。ひとは調理の過程で、じぶんが生きるために他のいのちを犠牲にせざるをえないということ、そのとき犠牲となるその生き物は渾身の力をふりしぼって抗うということ、身をもって知る。そしてじぶんもまたそういう生き物の一つでしかないということも。

そういう体験の場所がどんどんわたしたちのまわりから消されてきた。見えない場所に移動させられてきた。たとえば排泄物の処理。かつて排泄が野外や共同便所でなされ、汲み取りもわたしたちの面前でなされていたのに、下水道の完備とともに排泄物処理が見えない過程になった。あるいは病人の世話。これも病院という公共の施設へと外部化された。出産や死という、人生でもっとものびきならない瞬間も家庭の外へと去った。いのちの誕生には母親のすさまじい呻き声や、赤ちゃんの噴きだすような泣き声がともなうことも、じかに知ることはなくなってしまった。

誕生や病いや死は、人間が有限でかつ無力な存在であることを思い知らされる出来事である。おなじように調理や排泄物処理の仕事も、じぶんがほかならぬ自然の一メンバーであることが思い知らされるいとなみである。そういう出来事、そういういとなみが、「戦後」という社会のなかで次々に外部化していった。こういうことが人間のいのちにとってのもつ意味を、わたしたちはくりかえし考えぬく必要があるだろう。

こういう視点からいのちについて考えてみると、脳死判定、臓器移植、安楽死、人工中絶、有機栽培などといったいのちの「現代的」問題についても、よくなされ

ているのとは別の議論の仕方も見えてくるのではないだろうか。とりわけいのちはだれのものか、いのちの座ともいうべき身体はだれのものかといった問題を中心に。 (この最後の問題については、わたしは、拙著『人称と行為』第一部〔昭和堂、1995年〕、ならびに「生の交換・死の交換」〔中村雄二郎・木村敏監修・講座《生命》 vol.1『生命の思索』所収、哲学書房、1996年〕という論考のなかで主題的にあつまっている。)

さて推薦本である。とりあえず三つ挙げておきたい。

霜山徳爾『人間の限界』（岩波新書、1975年）。いのちを支えあう光景、いのちとの告別を語りだすことばが、透明な雫のようにこぼれてくる。

ヴィクトール・E・フランクル『夜と霧』（フランクル著作集1、みすず書房、1961年）。夥しいいのちの虐殺がなされたドイツ強制収容所での、収容された一心理学者による記録である。

木村敏『あいだ』（弘文堂、1988年）。『生命の根拠』についての哲学的論考である。いのち相互の〈あいだ〉と、ひとつのいのちの内部の〈あいだ〉との結びつきが考察されている。

（『読書探検』第22号）